



全ては「蟬しぐれ」から始まった。平成13年のある日、東京・赤坂でIT企業を経営する宇生雅明さんの元に、旧知の映画監督・黒土三男さんが訪ねてきた。藤沢周平の代表作「蟬しぐれ」の脚本を完成

映画「蟬しぐれ」の 製作資金集めがきっかけ

かつて庄内藩14万石の城下町であった山形県鶴岡市には、数々の史跡や由緒ある建物が残っており、多くの観光客が訪れる。また、作家・藤沢周平の出身地であることから、同地を訪れるファンも少なくない。そんな鶴岡に、近年、新しい観光スポットが誕生した。そこでは藤沢周平の小説を原作とする映画をはじめ、数々の時代劇作品の撮影に使われたオープンセットが、「庄内映画村」として一般公開されているのだ。路線バスも通っていない山の中だが、映画を起爆剤に名を広め、さまざまな方面から注目されている。



▲「庄内を日本のハリウッドにしたい」と語る宇生雅明社長。映画村の社は史跡の木造建築内にある

「映画が完成し、ようやく本業に戻れそうだった宇生さんだが、「蟬しぐれ」の配給会社である東宝から、公開までの8カ月間、撮影地の鶴岡市でプロモーション活動をしてもらえないかと、宣伝プロデューサーの仕事を頼まれる。乗り掛かった船」と腹をくくった宇生さんは、撮影に使用したオープンセッ

映画のオープンセットを公開し 観光客を呼び込む

させたのだが、製作の資金が集まらないというのだ。インターネットで呼び掛けても反応はゼロ。ホームページの文章やデザインに問題があったのだろうか？

宇生さんは、「一見して「そうではない」と思った。表現の巧拙ではなく、黒土さんの熱い思いが、ネットでは伝えきれなかったのだ。脚本は素晴らしい出来栄で、「こ

れならいける！」と確信した宇生さんは、伝手をたどって鶴岡市のキーパーソンを訪ね歩いた。藤沢周平の故郷であり、「蟬しぐれ」の舞台にもなっている鶴岡なら、この小説を愛し、映画にして後世に残したいという人がいるに違いないと考えたのだ。

山形県鶴岡市 庄内映画村

鶴岡にオープンセットを建てて撮影に入ってから順調に進み、17年1月、ついに完成。高い評価を受けた映画は、第29回日本アカデミー賞でも、作品賞をはじめ、監督賞や脚本賞、主演男優賞（市川染五郎）、主演女優賞（木村佳乃）など、数々の部門で優秀賞を獲得している。

特集

取材・清水 高
山田清志
関根利子

旅行者ニーズの多様化で、これまでの名所旧跡を訪問するだけのものとは違う「体験型」「交流型」などの新しいタイプの観光が創出されている。観光資源をつくり出し地域を活性化させるこうしたニューツーリズムは、どうやったらうまくいくのだろうか。成功事例を取り上げた。

新しい観光づくりに 挑戦しよう

